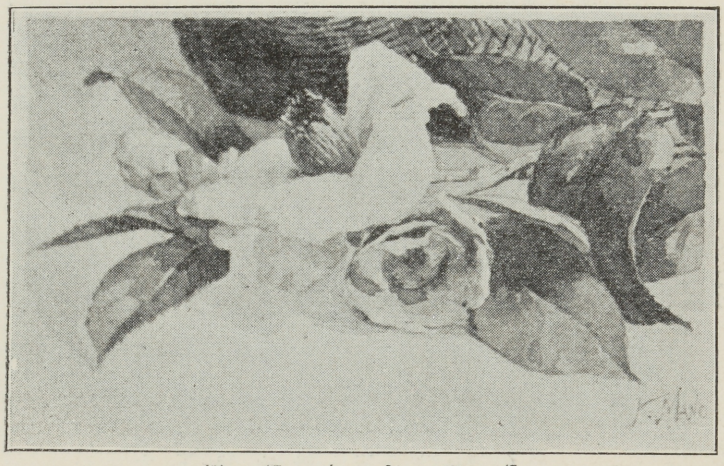
美術に於ける科學的眞理

彫刻家、畫伯、さては詩人を指して、科學に於ける嚮導者なりと云ふもの世界中一人としてこれあるまじ、所謂詩的放肆を俗に碎いて言へば、詩人は自由に天地の現象に就て其想像を逞しうし得べしといふにあり、詩的想像を以て森羅万象を觀る、豈それ詩人のみならんや、廣義に於ける美術家皆然り。然らば即ち詩歌或は美術品と所謂科學とは相反する事あるは勢の免れざる處なり。星晨を指して**ハイネ**が「天空に於ける金のピン」と云ひたる豈科學の許すべき處ならんや去りながら美術に於て時としては科學的眞理の含有せられたるあり即ち美術家は、非凡の天才を以て天地人を觀じ科學の未だ達し得ざる眞理を啓示するあり、近く例をとらんか、英の畫伯**ピントウリルナー**の畫きし電光を見よ、其閃々たる處毫も當時に於ける學問的の電光にあらず、之を以て彼は一時批難せられぬ、去りながら半世記以後の今日に於ける學問即ち發達したる科學眼より彼の畫を視よ、電雷暗雲を劈いて走る處、科學の眞理に迫れりと謂ふべし。云々（北米理科雜誌）



眞野記太郎筆

ぬきがき

水聲無思

▼古い明治美術會の報告に、故林忠正氏の演說がある。その中の數節を御披露しやう。何れも今の畫を學ぶものが傾聽してよい事許りである。曰く

△繪畫の實體を描くを能はざれば精神を描くこと能はざるものなり。

△繪畫の活物たる猶ほ人の如し、畫の實體は猶人の身體の如きなり、畫の精神は猶ほ人の精神の如きなり、苟も神體共に備はらざれば安全なる活畫といふべからず。

△夫れ人の畫を感ずるや、眼先づ之を視て而して心之を觀るものなり、畫の實體先づ我眼に感觸して、而して畫の精神我心を感動するものなり。

△故に畫人は實體を描くを措いて別に精神を畫くこと能はざるものなり。不備の實體に依て十分の志想を表出せんとするは、猶ほ文字に富まずして詩を作るが如きなり、其思想や嘉みすべし、其詩や吟ずべからず。斯の如きものは技術と稱すべからざるなり。

△余は今の畫人を以て、已に畫の實體を能くするもの、又繪畫揮描の技に鍛錬せるものと認むる能はざるなり、故に余は今の畫人に向て、實地揮描の技を十分錬磨あらんを希ふ者なり、物の實體を描くを勸むるものなり、物の形を寫して眞物の形を見るが如く、物の色を寫して眞物の色を見るが如く、物の光